

セントクリストファーネビスの夜

御宮狼

第三話

*

回転式ドアのなかを等身大の植木を二つ左右に抱えたソニーのウォークマンをした花屋が回っている。若いパキスタン人。黒いエプロンのうえで黄の花は刺さるように鮮やかだが本来秋の花ではない。季節を犯した科学の花だ。

1

月曜日の早朝、このオフィスビルは週末と風景を一変させる。誰もがこの曜日に、引きずる懸案に片を付けようとし、新しいスケジュールを作ろうとする。一週間のなかでもっとも騒がしい一日だ。

ロビーは広く、隅に並ぶ電話のブースではダークスーツで固めた男達が電話をかけまくり、指示を飛ばし、念入りな打ち合わせを始めている。

エスカレータで香村はエレベータホールに向かった。

上昇予約ランプを押したのは英字新聞を小脇に挟んだ青いつーピースの若い女性だ。黒い皮革の鞆を下げてシルバーラインの入った白いスニーカーを履いている。

開かない扉をまえに一点集中する人々の思惑は点滅するランプほど単純ではないだろう。

待っていた人々はようやく吸い込まれ、それぞれの思惑がそれぞれのボタンをガチャガチャ押した。扉が閉まるとパキスタン人の抱える花々の人工的な微香が休日開けのビジネスマンを刺激した。花屋の耳栓からBGMが漏れている。

人々は満員のエレベータのなかでも自分の位置を捜し

ながら守るようにして立っている。

花屋が六階で降りた。七階で数人が吐き出され、八階で一人が消えた。九階と十階を通過し十一階でランプは停止した。乾いた音を残して扉が開いた。大きなバッグと傘を持ったサングラスの女といっしょに放り出されるようにして香村は降りた。

デスク上の配置を一瞥してから椅子に深々と腰掛け、コンピュータの電源スイッチを入れた。キーボードを叩く。本日のスケジュール。画面を変えて週間スケジュールへと移る。さらに画面を変えて数行のメッセージ。本社からのメモ。同僚の挨拶文。他愛ない通信のやり取りをしたあとボタン一つですべてを消した。

*

香村は、会社を午前中で切り上げ、成田で暇をつぶした。何本もの飛行機の離陸と着陸を見ていた。

ゲートを出てきたケイは満面弾けるような笑みを浮かべ、大きく腕を振って走り寄った。そして長いあいだ香村を抱擁した。

2

*

車に乗り込むとケイは押し黙り、急に不機嫌になった。良く日焼けしたケイの横顔は憔悴しきっていた。

大量の雨がフロントガラスを叩いていた。ワイパーが効かない。

香村は、木曜日デッサを連れてソウルから帰国したときと同じような風景だと思った。

その日もまた、関東一円は温帯性低気圧の通過に伴い、強い雨と風にまみれていた。そしてデッサもまた終始寡黙だった。

*

正面から降り注ぐ雨を車体が激しく弾いている。前を

走る尾灯が赤い流線形をつくり、対向車のヘッドライトが断続的に襲っている。

車は往復六車線のハイウエーを関東平野を西へと目指して走る。香村はハンドルを片手で軽く切りながら煙草の煙を吐いた。煙はガラスを跳ね、外に吸い込まれるように流れ出、雨に打たれた。隙間から雨が吹き込んだ。

ラジオが天気予報と交通情報を告げると音楽番組に移った。音量を感度する赤いデジタル波が香村の膝元で波打った。

雨足が激しくなり、視界を狭くした。ワイパーに刻まれて時間は過ぎた。大量の水が弾かれるごとに沈黙は強弱されていくだろう。

金色の飾り物は耳たぶのしたで鈍いひかりを放った。片方は髪に隠れている。助手席後部のシートに座りドアに依りかかったままデッサは身動きしない。暫時眼は開閉されている。

車は豪雨を切り裂いていった。香村は前方を睨んだ。ソウルの乱雑なスピードが体に残っていた。ハンドルに確信がない。異質の断片的な速度の体験があるだけだった。

「じれったいわね」

ようやくデッサは口を開いた。長くなった灰の先を引き出したボックスの端で始末し、バックミラーで女の言葉を確認した。じれったいって何だ！

湾岸道路を抜け、首都高速へ車はさらに加速した。急ぐ車をはやしたてるように都心のネオンサインが夏の雨と踊った。

*

「うれしい！ 靴を履いたまま食事できるんだ」

デッサは言った。

香村は旅行鞆を床に置いた。ファスナーを開けるとソウルの匂いがずっと漂った。留守中届いた封書と絵葉書に目を通して鍵と一緒に椅子に投げた。

「機内の酒が余分だったわ」

疲れた様子で女は窓を背に置かれたパイン材のデンマークスタイルの大きなベンチに腰を降ろし、上着を脱い

で、肘掛けに掛けた。そして品定めするかのようには部屋の隅々を見渡した。

「いい部屋ね」

「山小屋って呼ばれてる」

「やるじゃない」

「空調は壊れ、灯りは時代錯誤のランプ、鏡は縁もなくひびが入ってる。眼覚ましの音はベッドの軋みだ」

「ベースキャンプね」

「遭難者を待ってる」

デッサは表情を変えた。無意識に出た遭難という言葉に香村は後悔し、続けてごまかした。

「上等な酒が並び如才なく布やインテリアが配置されていて、堪能すべきライティングを計算し、音楽との融合、環境を設定し……という希望の時代もあったんだけど、全部面倒臭くって、山荘は今こんなだ。荒れるばかり」

香村は言葉とほぼ同時に窓をピシャリと閉め、冷房をフル回転させた。コンパクト・ディスクを引っ張り出してきた。

「音楽、いらない」

「聴きたいな」

「じゃあどうぞ」

香村は選んだ板をテーブルに投げた。

「美術でもやるの？」

「……………」

女が指さしたのは板張りの床だ。ベーコンをはぎ合わせたように痛んで、煙草の焦げ付きや虫の腐った跡に混じって油絵の具の染みが無数に残っていた。

「もともとはアトリエだった」

「有名な絵描きなのね」

「この家を長く借して欲しいと言ったら未亡人がちょっと考え込んで条件を出したんだ。膨大な絵や彫刻、調度品やコレ「で、焼いたの？」

「せっかくだから売りさばいた」

「売れた？」

「ぜんぜん。五年経ったいまもワインと絵を販売してる」

「ワイン？」

「地下倉庫はワインセラーになってる」

「やるじゃない」

「窓を開けると林がみえるだろ。その裏にでかいお屋敷があって未亡人が一人で住んでいる」

女は移動し窓から外を眺めた。雨は止み雲から月が顔を出していた。

「夏のあいだ彼女は東京を離れてる」

「深い傷。床が痛んでる」

「表現者の苦悩だ」

女は短く笑った。

「案外だね」

「案外？」

「的外れ」

「的外れ？」

「うん」

「難しい日本語」

二人は同時に笑った。

「靴を履いていないと落ち着かないんだ」

「避難民とおんなじね。あんたも靴を履いたままセックスするの？」

「もちろん」

「シャワーも靴履く？」

「もちろんだ」

「あんたは墮落してる」

二人は初めて陽気に笑った。

「日本人の部屋に何度も通されたわ。みんなおんなじ。豪勢で息が詰る」

「息が詰まる？」

「上等な酒が並び、布とインテリアは、如才なく配置され、堪能すべき照明と、計算し尽くされた環境と、音楽の融合……」

二人はまた笑った。

「いい時間がある。安らぐ。経済は饒舌を追って時間を忘れたんだ。それから」

「それから？」

「色気がある」

「それは買い被りだ」

「経済と饒舌と時間と色気の関数。とことん買い被ってやる」

「厄介だな」

「ええ、私は、面倒よ」

床に立て掛けられた時計の長針が一瞬ぶれて短針ときつい鋭角をなし、午前二時をつくった。

「お茶をご馳走するよ」

「うれしい！」

「歓迎の印だ」

「お茶でも飲めば、あのソウルのまずいワイン、舌から消してくれるかしら」

「さあね」

台所に入り、銅製の湯沸かしに水を入れ、火にかけた。その火で煙草を吸った。

「部屋にも色気あるかな」

「存在しない？」

「わからない」

「いい影が落ちてる」

「ランプのせいだ」

「住人の心の問題ね」

デッサは卑猥に微笑み、男の顔からは友好的な笑みが消えた。

「禁欲で癡猛」

湯が沸騰している。

「あんたのことよ」

言って女はケラケラ笑った。

「部屋の陰影はあなたそのもの」

6

*

ガスレンジを捻って火を止めた。振り返ると女は細い眼で射抜くように男を見つめている。男は陶製のポットに乾燥した薔薇を入れ、熱湯を注いだ。

「何者だろうね。ただのインテリ女には見えない」

「誰？」

二つの陶茶碗から湯気がまっすぐ伸びていた。乾燥した薔薇の花びらを入れた。

「召し上がれ」

両手で茶碗を受け取って女はうまそうに茶をすすった。

「ずっと雨だったね。ソウル、東京と」

訪問者に香村は初めていたわりの言葉をかけた。

「機内でも、車のなかでも、君が寝ている時も雨は降り

続けていた」

「私寝てない」

「雨音を聴いていた？」

「あんたを見ていた」

「瞼を閉じながら？」

女は声を出さず笑って肯定した。男はランプを消して壁に付けたスタンドに切り替えた。湯飲み茶碗の影がテーブルの木目上にスッと延びた。

「通訳というのは本当よ」

女は笑っている。

「あんたの質問に答えた。ベトナムで生まれてマニラと香港で育った。父はフィリピン人。母は華僑の娘。デッサはフィリピン名。国籍は香港。マニラが一番長い。それに楽しかった。大学を卒業してからは日本と台湾に半分ずつ住んでるかしら」

「ソウルでの話はでたらめか。名前も嘘？」

「私を飼って下さらないかしら」

「……」

「唐突だった？」

「いや」

男は明確に発声した。

「興味がないかな。私に」

「自分を捨てて飼われるのか」

「いけない？」

「いや、そんなことはない」

「傷を癒すの」

「傷？」

「ええ、傷をなめあうの。男と女が傷を、ヒリヒリして血も出ないどうしようもない傷をハアハア言ってなめあうの」

男はたじろいだ。

「妙なことを言うね」

「あんた自分を飼うので精一杯。あんたの心臓、自分の爪の引っ掻き傷でいっぱい。見えない傷がいっぱいある」

灰皿を手もとに引き寄せ時間をかけて残りの分を吸った。女と出会って一日も過ぎていない。確証があったわけでもない。拾われるように女は男についてきた。しかしなぜこんな深みに俺はいるのだろう。

「約束する。毎日花を飾りましょう。掃除はきれい。料

理はやれる。お酒は好き。夜中の話相手としてなら十分だとおもう。夜の運転は任せて。経済的には従属しない。多くのことを知りすぎて傷もつかない。違う女の邪魔にはならない。何よりあなたに尽くす」

「最後の句は大嘘だろう」

「退屈だったらその場に出てゆく」

女が瞳孔に少し力を込めて、微笑んだ。

「人質はいかが？」

「人質？」

「そう。生け贄になる」

「何、それ」

「賭けるのよ」

「君を人質に取って何を賭ける？」

「あんたの自尊心」

女はまるで勝利者のように席を立った。

「とりあえず今日、眠りから醒めたら挨拶もないままここを出てゆくことにするわ。それが望みなんでしょう。わかったわ」

「そしてまた戻る」

「それはわからない」

女は振り向き男を一瞥して言った。

「この辺にしましょう。もう夜が明ける。お茶をどうもありがとう。とてもおいしかったわ」

男はじっと女を見た。

「だけどあんたの前戯は、饒舌すぎる」

女は近寄り、腰を屈めて男の唇を湿らせた。

男は沈黙した。一瞬である。お休みなさい。それは幻聴だろう。女は、堂々と寝室へ入っていった。

*

世界革命を成就するのは亡命者か人質によってである。男は薔薇の花びらを見ていた。女はドアも閉めずに衣服を脱いでいる。灯りもない。

薔薇は茶のとても薄い緑色に浮かび、羞らうような影を器の底につくっている。その影が揺れた。

速いビートが欲しかった。

*

「この台風でも遊園地はやるのね」

ケイの言葉に香村は答えた。

「関係ないさ！」

二人は喜んだ。

成田を出発し、都心の遊園地に到着するころには雨はずっかり上がり、西の空には夕日とともに快晴が覗いていた。だが風は依然強く、道路に沿って等間隔に植えられた樹木が大きく揺れていた。広大な駐車場のアスファルトには前日までの台風で吹き飛ばされた葉が散乱していた。

ジェットコースター乗り場に向かって蛇行する列の最後部に香村は付いた。ケイは二本の缶ビールとポップコーンを買って込んで香村の横に並んだ。

行列は幼虫のように進んでいった。

女が左で、男は右にジェットコースターの席を取った。シートベルトはしない。いつもの調子だ。

二人は缶ビールを開け、半年ぶりの再会を祝ってぶつけあった。

コースターは緩やかに発進し、いっきに風のなかへ切り込んでいく。

ケイは気持ちのいい顔をした。

「あなた覚えてる？」

「え？」

「風。メキシコの風」

「シティ？」

「西海岸」

「海風か」

「じゃない。ホテルで吹いた風よ」

「え？ 覚えてない。どんな風」

「透明だった」

風は全部透明じゃないのか！？

香村はケイの横顔を見た。彼女の表情がやっと輝いた。

*

メキシコの映像は色褪せていない。

二人はモーターバイクを借り、西海岸をツーリングした。体温をかんじると風にぶつかるのとどちらが簡単か。男は女に訊いた。両方同時に欲しい。風を全身で切る。体温は背中を感じるの。欲ばりな女は男を乗せて走ると主張した。単車に触ったこともなかった女が体よりでかい単車を動かした。

ハンドルを握ってエンジンを噴かせば風なんて簡単に手に入ることを女は知った。男は後ろで歓声をあげた。二人はカリフォルニア半島の南端カーボ・サン・ルカスを目指した。

飛ばすことに意味があった。

風がぶつかってくる。まるで風のブロックだ。あなたを背中にかんじる。

えッ？ 何

いい。いいってことッ

えーッッ？

1

*

その夏、ケイはメキシコシティを拠点にインディオの文化様式を撮っていた。

同じホテルに宿泊する日本人。石鹸のない洗い場。太陽はギラついた。朝からすべてを支配する勢いだ。

彼女は蛇口をいっぱいに開け脳天に水を落下させ髪と顔を洗っていた。香村は自室のバルコニーに出て、外を眺めていた。びしょ濡れの長い髪を絞りあげてタオルで拭きながら彼女は振り返った。おはようと言った。気持ちがいいわ。出てらっしゃいよ。瞳が光を浴びて輝いた。

学内の演劇活動を軽蔑し、所属していた人材派遣会社まがいの俳優養成所の活動に熱を上げる気にもなれなかった。香村は、テレビドラマや三文映画で通行人や群衆や患者といった要するに科白のない役をこなしては幾らかのギャラを得、これといった決定打も出ずに、退屈なオーディションを繰り返し受けていた。

現実と仮想が混濁し、キャンパスでの悶々としたエキストラ生活はなかなか解消できなかった。

誰もが六十年代を軽蔑していた。七十年代なんて糞だ。

就職が近づくと友人たちの多くが舞台を降り、パズルのような経済や金融の知識を覚え、資本主義のマナーを一夜漬けて去っていった。

早々と留年が決定し当てのない旅行を思い立った。芽のでない三文役者で一生を過ごすには、未来は芒洋としてあまりに長過ぎる。結論を出すには経験がなかった。

「女々しい動機なこと」

笑ってケイは片づけた。

ケイはすでに何度かの海外の旅を経験していて、彼は初めての日本脱出だった。二人は地球の裏側でばったり出くわし、その衝突は確率的に限りなくゼロに近いと決め込んだ。二人の風の体験はメキシコの地で始まり、いっきに狂った。

風は自分で作るものだと言われ、男は風を自由と間違えた。

二人はメキシコで息投合したのだ。

*

1

海岸線が直線に延び太平洋に突き出た半島に直角にぶつかっていた。霞んで見える半島は薄く白い地平を引きずり、波に打たれて浮かんでいた。

男も抱かれないのさ。

えー？ なに？

男も抱かれる。

何言ってるの？

聴こえないッなんでもないよ。

何でもない。

えッ？

ちゃんと握れよ！

不自由な男が自由な女の背中にしがみついた。

単車は白く乾いた直線を疾走した。最果ての地平はおもしろいように近づきながら遠ざかった。

砂浜に単車を転がして、その横で二人は抱き合った。

燃料なんてどこでも補給できる。二人はまた勘違いした。

*

香村は缶ビールを口に流した。ジェットコースターのスピードに泡が反応して吹きこぼれそうになった。

「男も抱かれないって、私の耳には届いていたわ。ちゃんと聞こえていた」

ホップのつよい香りがした。

「そう言ったのよ。あなた」

「嘘だろう」

ケイはにっこりと微笑んでポップコーンの封を切った。

「覚えていない？」

「忘れた」

「あなたの言葉よ。その言葉が私を張り付けにした」

コースターのスピードが増幅していった。

「あなたがホモセクシャルじゃないことを願ったわ」

二人は笑った。

「覚えてないね」

「嘘ばかり」

女はポップコーンを一つ口に入れた。

「女々しくて女々しくて、どうにも恥ずかしいとかんじながら生きている。女々しい感性をあなたは捨てようとしな。むしろ大切にしている」

そして女もまた男を抱くことができる。男の広い肩を抱きながら、男のように、いいえ、女として野心を抱いていくのよ。そう、私には野心があるわ。

絵を見ても、音楽を聴いても、人とお喋りしていても、何か女々しいとおもう感じ方をそのまま受け入れる。通していく。それはむしろあなたのなかの自信の裏返しよ。彼女は決めつけた。

いまでは海外の旅先でも幾らか心付けの手渡し方も決まるようになった香村は、臆することもなく彼女に抱かれ、いくつかの言葉を葬り、その数だけ未知の世界を知った。香村は女の腕のなかで日常を学習し、ケイは男の胸で世界を写していった。

「なぜ今そんなメキシコの話をする？」

「いいじゃない」

「そんな昔の話」

「いいじゃない」

「変だよ」

「いいじゃない」

コースターが急角を描き、螺旋状に回転した。遠心力で身体の芯がぶれ、末端で血が逆流した。

鳥が斜めにすれちがった。

彼女は手のひらにつかんだポップコーンを空中にカー杯まき散らした。ポップコーンは一瞬ふわりと宙に浮かび円を描いて落ちていった。

香村は缶ビールを振って泡立て薄暮の空にかけ続けた。飛沫が玉となって二人に降りかかった。「あああ、いい。いいわ。このスピード」

ケイは分厚い雲の垂れ込めた空見上げて顎を突き上げ気持ち良さそうに言った。

「スピードはやっぱりいいわ」

「写せる？」

「スピード？」

「そう、スピード」

「そうねえ。わからないわねえ」

「匂いとおんなじさ」

「そうかなあ」

1

*

遅れるもの。進んでいくもの。過ぎ去ろうとするもの。立ちすくむ人。叫び。聞こえぬもの。見るものと見ないもの。進歩と後退。創造と破壊。何かが生まれ、突然の死。それを一枚のネガに焼きつける。平面に静止する時刻。時間への挑戦？ そんなんじゃない。ただ快感だけだ。メキシコから帰国して一か月後二人は再会した。古代遺跡ボナンパック。ユカタンの森。マヤの末裔。野犬。棺。コカの葉と花。開発され尽くされようとする海岸線と森林。

彼女の絵は大胆に押し切られ、メキシコの国土と歴史に没頭しようとする女の情念が大量のネガに焼きついていた。

*

遠方で建設中のビルはまだまだ階数を重ねるだろう。鉄骨を地上から引き上げる大型クレーンが熱帯夜を吊り上げるように長い腕を伸ばして屋上に鎮座した。その影は闇のなかで不可解という字にみえた。

頭上には巨大な円盤が赤と緑と橙と青と紫の光をばら蒔きながら回転し、楽園を守る壁の電飾がその光を反射させていた。

地上のいたるところに闇が溜り、無軌道の熱風が吹き込んでいた。

詐欺師に会いに行くように男女は遊園地の乗り物を征服していった。

*

何か月も会えないことはめずらしくなかった。会えば何もかも忘れ、互いに晴れやかになれる。二人はそうして再会を繰り返してきた。だが今度の帰国はそうではなかった。ケイは何かに恐れ、香村はそれを敏感に察知した。

半年ぶりに再会した二人は、何かを確かめながら、欲望の淵をさまよい、翌日、遅すぎる朝食をいっしょに食べた。